

障がいに対する理解を深める研修・啓発活動講師団 ニュース

～障がいの有無にかかわらず、お互いに認め合い、思いやり、支え合う社会をつくるために～

No.9 2015.8.27



今年度初の講師団活動です。県立別府支援学校の教職員を対象に、「ともに生きる条例について」というテーマで研修会を開催しました。

平成27年7月24日（金）13:30～15:30

会場：別府支援学校会議室

教職員約60名が参加しました。

研修の流れ

- ① **ともに生きる条例の概要**（30分間）
条例の概要について説明しました。
- ② **1人ひとりのチカラ**（30分間）
川野陽子さんが、「1人ひとりのチカラ」というテーマで、実体験を交えた話をしました。
- ③ **グループ討議（合理的配慮について）**（50分間）
合理的配慮が必要だと感じた場面とその解決策について話し合ってもらいました。



グループ討議について

教職員が各組5～6名の10組に分かれて、合理的配慮が必要だと感じた場面とその解決策について話し合いました。「パニックになる生徒がいるので、クールダウン用の部屋を確保したほうがよい」、「車椅子の生徒にとっては教室の電気のスイッチが高すぎる」、などの学校内での配慮をはじめ、「障がい児の歯科治療をしてもらえるところがない」、「別府駅の改札が狭く、車椅子が通れない」、「駅の路線図が漢字で書いているため、知的障がいの方は読めない」など、学校外の生活に関わる配慮についての意見も多く出されました。

と も に 生 き る 条 例



発行：別府市福祉保健部障害福祉課

〒874-8511 別府市上野口町1番15号

TEL：0977-21-1413 FAX：0977-22-1780

E-mail：haw-hw@city.beppu.oita.jp

市ホームページ URL：http://www.city.beppu.oita.jp



私は、ウェルドニッヒホフマン病という先天性の病気で、2歳のときに病名を診断されました。

小学校に上がるときには、親が養護学校に通うか普通校に通うかすごく悩んだそうですが、最終的に、リハビリを受けながら養護学校に通うことにし、実家の中津から西別府病院に入院すると同時に隣の石垣原養護学校に入学し、小・中・高と12年間通学しました。最初は家族と離れてさびしかったけど、看護師さんや、入院仲間もいたし、学校の先生もすごく良くしてくれて、楽しい生活を送れました。

よく普通校で障がいのない生徒と一緒に過ごすことが大事といます。確かに大事だとは思いますが、私の場合は、今の私があるのは養護学校のおかげだと思っています。支援学校では、先生がマンツーマンで教えてくれたりしますが、普通校ではなかなかそこまではできないと思います。

それぞれが普通校か支援学校かを選択できるという状況がよいのだと思います。

高校3年生時は進路に悩みました。当時の養護学校は、卒業したら療養生活を送るということしか選択肢がありませんでした。高校を卒業してどういうふう生きていくんだろう。テレビ見て、ご飯食べて、リハビリして寝るのかな、そんなのやだな、と思いました。先生に相談したら、「自分のできることからやってみたらどう？」というアドバイスをもらいました。

それで、考えた拳句、今の気持ちを卒業文集にして残そうかな、と思い、先生からアドバイスを受けながら思いをつづった文集をつくりました。先生は、休みを返上して、学校で一冊一冊を丁寧に作ってくれました。こういった支援というのは、普通校ではなかなかできなかったんじゃないかと思います。

先生のおかげで、文集を「しあわせのたまねぎ」という一冊の本にして出版することができました。

これがきっかけとなって、全国の色んな人とつながることができました。そうすると、自分に自信が出てきました。もしかしたら自分は色々な挑戦ができるんじゃないかと。

それで、実家の中津に帰って、短大に通うことにしました。

私の通った大学では、車椅子の学生は初めてでした。大学側で、どういった配慮が必要なのか、何度も何度も会議を開いて、考えてくれました。大学側が配慮してくれたことはたくさんあります。まず、大学の入口にスロープをつけてくれました。また、私は車椅子に乗っていますが、一日中車椅子に乗っていると苦しくなるので、ベッドを設置してくれました。さらに、トイレもベッドの上でするので、そのための部屋を確保してくれました。

このように、ハード面については大学側に配慮していただきました。

大学にはエレベーターがなかったので、毎朝誰かに階段を抱えてもらって上り下りする必要がありました。そこで、階段の前で、誰か助けてくれないかなあと待っていたんです。だけど、学生たちは、「大変そうやなあ、階段上がれんのかなあ、助けが必要なら自分で言うわなあ」と通り過ぎていくんです。車椅子なんだから皆助けてくれると思っていて私は、「なんで？」という気持ちでいっぱいでした。でも、このままじゃあ大学生活は楽しくない。友達をつかって楽しくしたいというのは、障がいのあるなしにかかわらず共通の思いだと思います。そこで、どうやったら皆との目に見えない壁を取り除くことができるのか悩んだ結果、まずは待てるのではなくて、自分からあいさつや声かけをしようかと決めたいんです。

「おはよう！」「手伝って」、声をかけることによって、自然と周りが手伝ってくれるようになりました。自分から声をかけることによって、「手伝ってもいいんだ」「こうすればいいんだ」と気付いてくれるようになりました。友達は、ノートの写しをくれたり、階段の上り下りを手伝ってくれたり、「陽子は障がいがあっても皆と何も変わらない、困ったことがあったら言ってね」という声をかけてくれたりしました。

こういったハード面、ソフト面の両方の支援がなければ、私は大学生活を送ることができなかつたと感じています。

「ともに生きる条例」ができて、条例が本当に力を発揮してくれることを私たちはすごく期待しています。

そして、私たち障がいのある人も、自分たちのできる役割をきちんと持って生活していく。

自分自身に合ったサポートを受けることができる環境であれば、どんな重度の障がいを持っていても、色々な挑戦ができるんだ、ということを感じています。